



学校だより

(7月号) 令和2年7月1日発行

<http://shibiraki-e.saitama-city.ed.jp/>

【学校の教育目標】

◎ 夢 (ゆめ) に向かって ともに学びあう学校

- ・進んで勉強する子
- ・自分からあいさつのできる子
- ・仲よくたすけあう子
- ・じょうぶな子

《今月の生活目標》・ろうかは静かに右側を歩こう

炭治郎とエンパシー

校長 河井 尚

文月となりました。水無月(6月)前半の分散登校を経て、「新しい生活様式」の下ではありますが、学校生活も通常となりました。この間、防犯ボランティアの皆様をはじめとする地域の方々、保護者の方々には大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。

子どもたちが学校に戻ってきて、彼ら彼女らの明るい笑顔と元気な声に元気をもらっています。子どもがいてこそこの学校だと改めて思いました。新しい生活様式での日常が続く中、次のような記事(西日本新聞 2020/6/8)を読みました。紹介します。

「おい、マスクはどうした」。マスクの品切れが続いていたころ、商店街を歩いていると突然、かなり声が聞こえた。振り向くと、初老の男性が道端で、幼い女の子をとがめている。その口元にマスクはない。のどかな昼下がり、不穏な空気が流れた▼正体不明の新型コロナは、社会の不安と不信を増幅させた。感染への恐怖心がとげとげしい言葉となって飛び交い、休業しない店や外出する人を過剰に非難する動きがある。見えないウイルスが人の心までむしばんでいるようだ▼すごむ男性に私まで身構えていると、女の子は「忘れちゃった」とにっこり。緊迫はとたんに緩み、男性も「うちに100枚ある。やろうか」と力の抜けた様子。子どもの笑顔には、コロナですさんだ心を包み込む不思議な力がある。先日、『ハンセン病問題から学ぶこと』という講演を聞きました。ハンセン病の歴史、ハンセン病患者さんやその家族等に対する差別の残酷さについて学びました。人権教育に関する研修会の一環でした。「新型コロナウイルス感染症に起因する偏見や差別の問題」についても言及がありました。世界では、米国ミネソタ州ミネアポリス近郊でアフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイドさんが、警察官の不適切な拘束方法によって死亡させられたことをきっかけに1950年代60年代の公民権運動のような大きな渦が巻き起こっています。古今東西、様々な人権課題がありますが、我々人類の社会ではどうすることもできないのでしょうか。

埼玉新聞(2020/6/17)の『さきたま抄』で、「エンパシー」というキーワードを取り上げていました。抜粋して以下に掲載します。

(略)「鬼滅の刃」が人気絶頂のまま完結した。(略)「史上最も優しい主人公」と呼ばれている主人公・竈炭治郎が、鬼になってしまった妹を、人間に戻すため闘うストーリー。各所で大ヒットの理由の分析が行われている。「なるほど」と思いながら読んでいる▼そんな時、ベストセラーになった「ぼくはイエローでホワイトで」の著者、ブレイディみかこ氏の本やインタビューを読んでいると「エンパシー」というキーワードが登場した。意味は「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって誰かの感情や経験を分かち合う能力」だという▼あ、これだ。炭治郎は、滅びゆく鬼の感情を読み、手を差し伸べる。人の心を取り戻した鬼の魂は救われる。「鬼滅」には「エンパシー」がある▼差別問題は新型コロナで、世界の分断が進んでいる。今、必要なのは他者の思いを想像し、受け入れる力「エンパシー」なのかも。「鬼滅の刃」や「ぼくはイエロー」の魅力に気付く日本なら、「エンパシー」を育む力を持っているはずだ。

この記事を読み、私は自身を省みるとともに救われた心持ちになりました。皆さんはいかがですか。